

夢二が残した日本 ―桜咲く国のボヘミアン―

竹久夢二美術館（東京・文京区） 2020. 10. 31～2021. 01. 31

「竹久夢二」は、センチメンタルな独自の画風の美人画を手掛けた大正ロマンの画家として知られ、水彩画、油彩画、挿絵といった作品には、日本の郷愁と西欧のモダニズムという「和と洋の要素」が絶妙な調和で存在している。

本展では、「和」の部分については、作品における日本らしさや日本への想いに注目し、国をもたずさすらう旅人に自ら心を寄せた一方、日本への愛着もひとしおであった。故郷の思い出、江戸への憧憬、舞妓、着物、旅先の風景と画伯ならではの視点でとらえた日本の姿の作品に注目され、展示作品からは盲目的に日本を懐かしむのではない画伯独特の批評眼が感じられる。

竹久夢二 《水竹居》 1930年代(昭和8)年 紙本着色



「水竹居」は清流と竹林にある書室を指し、中国の故事では、文人墨客（ぼっかく）の住まいの環境を意味している。

作品は、画伯が外国・ベルリンで描いた晩年の傑作で、モデルの透き通るような白い肌に、大きな目が特徴的な白人女性で、着崩した着物の衿から覗くうなじや背中が見られる。

日本情緒のすらりと伸びた健康的な身体に、画伯の好みの浴衣を着た女性が、穏やかな心境で制作したことを思わせ、モデルの優しさと伸びやかさが感じられていて、実に感傷的（センチメンタル）な雰囲気を漂わせている。



竹久夢二 《王春吉報》 1920年代（大正初期） 木版版画

新春をテーマとした、正月のこたつ、羽子板でくつろぐ二人の女性を描いた作品で、冊子「王春吉報」に掲載されている。

竹久夢二 《加茂の舞台 奈良の白壁》 1910年代 紙本着色 屏風二曲一双

京都の舞妓と奈良の風景を描いた作品で、モチーフは、女性、美人画、舞妓、京都・賀茂川、奈良・五十塔、風景である。画伯は日本の伝統に郷愁や愛着を持つ一方で、ひとつの場所に留まらず“さすらう旅人”であった。